

地域包括ケアシステムにおける認知症疾患医療センターの果たすべき役割 第5報 ～健康オレンジサロンの取り組み～

島崎 裕子¹⁾ 瀬間 良礎¹⁾ 森田 詠子¹⁾ 八木 瑞貴¹⁾ 高橋 さとみ¹⁾

金井 光康¹⁾²⁾ 針谷 康夫¹⁾²⁾ 美原 盤³⁾

1) 公益財団法人脳血管研究所美原記念病院 認知症疾患医療センター

2) 公益財団法人脳血管研究所美原記念病院 脳神経内科

3) 公益財団法人脳血管研究所美原記念病院 院長

[はじめに] コロナ禍により地域のサロンや老人会活動などの多くが活動自粛を続ける中、当認知症疾患医療センターは、令和4年から地域包括支援センターと共催し、認知症患者とその家族、認知症に関心のある方を対象に健康オレンジサロン(サロン)を開催した。開催目的は、早期診断されても何も支援がない空白の期間にサロンを通して、情緒的なサポートや適切な支援が提供されることで、地域からの孤立を防ぎ、認知症患者と家族の在宅生活の安定に繋がることとした。今回、サロンの意義について考察する。

[方法] 令和4年10月～令和5年3月の期間において計5回開催されたサロンの参加者、延べ52人(認知症患者11人)を対象に、サロンの開始前と終了後に生きがい意識尺度(Ikigai-9)を用いて、生きがい意識を評価した。サロンは1回90分プログラムとし、体操やゲームなどを行った。

[結果] 参加者は平均 10.4 ± 1.7 名であり、その内、認知症患者は平均 2.2 ± 0.4 名であった。Ikigai-9の総得点では、健常者(15名、1～4回参加)が平均 3.1 ± 3.0 点、認知症患者(3名、1～2回参加)が平均 3.8 ± 3.3 点、終了後に向上していた。また認知症患者では、下位尺度Ⅰ「生活・人生に対する楽天的・肯定的感情」およびⅢ「自己存在の意味の認識」において向上が見られた。

[考察] サロン終了後に認知症患者の生きがい意識が向上したことで、サロンが生きがい意識を向上させる一つの手段となり得ることが示唆された。毎回参加者の多くが「また参加したい」と希望されたことから、サロンの有益性が支持されたと考えられた。コロナ禍でのサロン開催にあたり、急遽会場の変更や中止などの対応を迫られることはあったが、継続して開催する意義は大きいと思われた。一方で、認知症患者の参加が少なかったことは今後の課題である。サロンが認知症患者に訪れやすいものとなり、

今後も活動を続けることで、地域に新たな社会資源として広く根付くことが重要である。